

「輸液管理とフィジカルアセスメント」 研修会に参加して

西群馬病院 薬剤科 鴫田春一郎

はじめに

平成26年7月12日(土)、国立病院機構東京医療センターにて「輸液管理とフィジカルアセスメント」研修会が開催された。輸液関連の研修は一昨年度から開催され、今年度で第3回目となる。毎回多くの会員が参加し、そのニーズの高さが伺える。また、一部の病院や在宅業務を行っている調剤薬局においてもバイタルサインチェックを行う薬剤師が徐々に増え始めている。薬剤師向けのフィジカルアセスメント関連の研修は、日本在宅薬学会や、群馬県においてもそのパイオニア的存在である群馬大学等が定期的に研修を開催している。その必要性を感じながらも、今まで参加する機会（意欲？お金？）がなかったために見送ってきたが、今回の研修開催の案内を受け参加を決意した。

研修内容

① 講義

まず、(株)大塚製薬工場の講師の方より薬剤師によるフィジカルアセスメントの重要性について講義を受けた。その最大の目的は診療行為ではなく、薬剤師目線で患者の全身状態を把握・評価することにより、薬による副作用の防止と効果判定に有用であるということである。さらにその知識や技能を身に付けることで医師や看護師と共通の情報を持つことができ、病棟スタッフの業務軽減にも貢献できる可能性もある。

次にCOPD患者の症例を基に急性増悪時の輸液管理についてと、そのフィジカルアセスメントについての講義を受けた。症例は肺炎治療で入院中に気管支喘息発作を併発し摂食困難となったCOPD患者の輸液処方提案をするというものであった。COPDのような呼吸器疾患患者は、肺性心あるいは滴状心となっている可能性が高く水分の過剰負荷の回避が重要である。本症例においては、1gあたり9kcalの高エネルギーを持ち、かつ呼吸商が0.7と呼吸への負担を小さくできる脂肪乳剤の使用が栄養管理のポイントとなった。時間の都合上、検討は速やかに進んでしまったが、私は呼吸器内科病棟で病棟業務をしていることもあり後でもう一度じっくりと考え直したい症例であった。

② 実習

実習はまず聴診器の使い方から始まり、二人組でお互いの脈拍を測定し水銀血圧計を用いて血圧を測定しあった。個人的に過去何度も行ったことがあるはずだが、久々に行ったためスムーズには行えなかった。バイタルサインの測定・評価はフィジカルアセスメントの基礎中の基礎であるため、確実にマスターすべき重要事項であることを再認識した。

フィジカルアセスメントを行うにあたって、「正常」を理解していなければ異常を発見することが困難であることは言うまでもない。本研修で

は心音や呼吸音などの正常音・異常音を録音した音源やフィジカルアセスメントモデル（フィジコ：株式会社京都科学）にて聴き分ける実習も行った。聴診器にて「音」を聴くにはその聴診部位が重要であり、更にその「音」が臓器のどのような状態を表しているのか理解するためには人体の解剖学的知識や生理学的知識等が必要となる。我々薬剤師が苦手とする領域である。さすがにこればかりは勉強し場数を多く踏み地道に経験を積むしかなさそうであるが、近年はiPadやiPhone等で学べるバイタルサイン関連のアプリも登場しており、そのようなツールも有用であると思われる。

そして、フィジカルアセスメントモデルを用いて2体の病態モデルA、BのどちらがCOPD患者か？というフィジカルアセスメントを行った。なお、このフィジカルアセスメントモデルには様々な疾患がプログラミングされており、コンピュータと連動して総合的にフィジカルアセスメントの基本診察手順を学ぶことができる優れたものである。今回の評価ポイントは瞳孔反射、呼吸音、心音、腸音の異常をペンライトや聴診器を用いて見極めるというもので、慣れない作業を皆で議論しながら行った。結果は病態モデルAがCOPD患者で、連続性の肺雑音（笛様音）が確認でき、心雑音はなかったものの頻脈であることを指摘でき

た。一方、病態モデルBは瞳孔反射のみに異常（左右不同）が認められた脳圧亢進患者モデルであった。

おわりに

本研修はバイタルサインやフィジカルアセスメントを基礎から学ぶ絶好の機会であった。今後も継続的に開催されるのであれば、今までに同様な研修を受けたことのない方にはお勧めであり、既参加者でも繰り返し参加することでそのスキルを向上できるものと思われる。恥ずかしい話、この原稿を書いている現在、研修から半年以上経過しておりその内容をすっかり忘れてしまっていた。元々馴染のなかった分野だけに、繰り返し繰り返し行わなければ習得できないスキルであることを今再び実感している。

現時点では聴診器を持った薬剤師が病棟等で活躍している光景はまだ少ないと思われるが、将来的にはそれが当たり前となる時代がすぐ近くまで来ているかもしれない。実際にフィジカルアセスメントをより有効かつ安全な薬物療法の遂行に役立てるためには相当の努力と時間を有するが、今回の研修がその第一歩となったと思う。

最後に、今回の研修で御指導頂きました先生方、研修の企画・準備・開催に関われました全ての先生方にこの場を借りて御礼申し上げます。

